

## 生徒と共に創り上げる体育学習の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/36026">http://hdl.handle.net/2297/36026</a>

# 生徒と共に創り上げる体育学習の検討

スポーツ科学課程 00-204 小川 直子

## I. 研究目的

現在、パソコン・携帯電話の普及により、直接的な人間同士の関わり合いが不足し、人間関係の希薄化が叫ばれている。そして、このことから自分の意見を相手に伝えることが、なかなかできないという生徒も増加している。生徒同士の関係は、お互いの機嫌をうかがい、自分の意見を隠しながら、友達のふりをしているように思えてならない。本当の友達とは、自分の本来の姿を相手に見せることで、お互いが大切な心の支えとなることができると考える。そのためにも、自分の意見を出せる、居心地のよい教室、環境を作る必要がある。それは教師一人だけでできるものではなく、他の教師、生徒、学校と関わる人すべてが協力していかなければならない。

そこで、いま体育の授業が果たす役割とは、生徒同士の生の関わり合いの場を提供することではないかと思う。

体育の学習とは、運動・スポーツの教育である。そのなかには、心を解放させる時間も含む。その心を解放させたときにこそ、生の関わり合いができると考える。体育の時間が、生徒たちにお互いの生の関わり合いの場を提供することで、先に述べた本当の自分を隠して付き合いおうとする生徒を少しでも減らすことができるのではないだろうか。たとえ、運動が苦手な生徒でも、体育の授業を楽しむことはできる。その体育の授業の楽しさが、仲間とともに活動することの楽しさだと感じ、仲間と一緒にいることの楽しさ、大切さを感じてもらいたい。そして、その関わり合いの中から、本当の自分を見つけ、本当の友達を見つけ、豊かな人間関係を作る手がかりとしてほしい。

そこで、本研究ではこの生徒同士の関わり合い意識に着目する。学習カードを有効に活用しながら、生徒たちの力に応じたルールを取り入れ、生徒の意見を引き出しながら、生徒と教師がともに創り上げる体育授業の成果と課題を明らかにすることを本研究の目的とする。

## II. 研究方法

1. 授業対象 金沢大学教育学部附属中学校 1年 3,4組の女子生徒 40名
2. 授業期日 平成 15年 10月 24日～平成 15年 12月 12日
3. 場所 金沢大学教育学部附属中学校体育館
4. 学習過程

ねらい1 個人やチームの特徴を見つけ、今もっている技能を高めながら、自分たちの力に応じたルールを工夫し、ゲームを楽しむ。

ねらい2 高まった力に応じてルールを工夫しながら、相手と競い合うことを楽しむ。

	はじめ	なか		まとめ
時数	1	3	5	1
ねらい	オリエンテーション	ねらい1	ねらい2	
ルール	正式なルール	ルール1	ルール2	

ルール 1：サーブはエンドラインより 1 m 手前、失敗しても 2 回まで打てる  
ルール 2：ワンバウンド OK、キャッチ・アンド・スロー、サーブは失敗しても 2 回まで打て、アタックラインより 1 m 後方から打つ

#### 5. 授業分析の方法

今回の授業では、以下の方法で授業分析を行った。

##### (1) スキルテスト

オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、2 人組オーバーハンドパス、2 人組アンダーハンドパスを行い、回数を計測した。計測時間は、すべて 2 分間であった。

##### (2) ゲーム分析

初心者のバレーボールの授業において、ゲームの様相を比較するため、高橋らの先行研究<sup>1)</sup>をもとに、サーブの成功率、ラリー数、総触球数を用いた。

##### (3) 形成的授業評価

体育授業における生徒の集団的・協力的活動を評価するために、小松崎らの形成的評価票<sup>2)</sup>を使用した。

##### (4) アンケート

質問 1 は、バレーボールの楽しさを、質問 2 は、バレーボールの継続意欲、質問 3 は授業を通して学んだこと、それぞれを探るために行った。回答は、「はい」「いいえ」「どちらでもない」であり、その回答理由も尋ねた。

質問 4 では、生徒の望む学習指導法を探るために行ったもので、①技術指導中心の授業、②ゲームが中心の授業、③新しいルールを工夫していく授業の 3 つの中で、どのような授業を受けたいかと質問した。

質問 5 では授業前と授業後のバレーボールに対する気持ちを質問した。回答には①大好き②好き③どちらでもない④あまり好きではない⑤嫌いの 5 つの項目を置き、当てはまるものを選んでもらった。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. スキルテストについて

今回の授業は生徒同士の関わり合い意識の形成に重点を置いたため、生徒の著しい技能の向上はみられなかった。それでも、授業開始時はアンダーハンドパスを多用していたが、バレーボールに慣れてくるにつれ、オーバーハンドパスの使用率が向上した。これは、ボールをコントロールしやすいのはオーバーハンドパスの方であることを自然と理解したためである。その結果、アンダーハンドパスの平均回数は 19.5 回から 18.5 回とやや減少したが、オーバーハンドパスの平均回数は 16.6 回から 18.1 回とわずかに増加した。

また、2 人組パスにおいては、オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの両方に増加がみられ、オーバーハンドパスは 14.2 回から 16.2 回、アンダーハンドパスは 8.1 回から 10.6 回と増加した。

#### 2. ゲーム分析について

サーブ成功率は授業のなか頃に 78.2 パーセントともっとも高い割合を示し、その後やや減少したが、ゲームの結果を左右するほどのものではなかった。

ラリー数はゲームやチームでの練習を重ねるにつれて増加し、最終的には平均で 70 回を超えるようになった。このラリー数の増加がバレーボールの楽しさの一つであり、ラリーが続く楽しさを生徒自身が感じていた。しかし、今回の授業

でのラリー数の増加はすべてが生徒の技術の向上からくるものではなく、個人プレーが出てしまったことによる増加もみられた。

総触球数はラリー数が増加するにつれ、同時に増加し、最終的には1回のサーブで、9回近くもボールに触るようになった。授業開始時はサーブのみでゲームが進んでしまうことがほとんどであったが、ゲームやチームでの練習を重ねるごとに、チーム内でパスをつなぐという行動が多くみられるようになった。

サーブ成功率、ラリー数、総触球数のすべてにおいて、ゲームのルールを生徒たちの力に応じたものに変更することによって、向上がみられた。そして、授業を展開し、生徒自身が練習やゲームを通してバレーボールの経験を積むことで、サーブ成功率、ラリー数、総触球数のすべてにおいて向上がみられた。

表 ゲーム分析

	10月24日	11月14日	11月28日	12月5日	12月12日①	12月12日②
サーブ成功率	61.94	61.04	70.56	78.22	70.56	73.16
ラリー数	3.33	4	18	36.67	71.33	109.33
総触球数	1.25	1.34	2.84	4.89	8.8	9.36

### 3. 形成的評価について

形成的授業評価については、授業開始時では総合評価は2.44と低いものであったが、徐々に増加を示し、最終的には平均値が2.82と増加した。この増加傾向は小松崎らの傾向と同様のものではあった。

これは、授業を展開するうちに、生徒が仲間と協力することの楽しさを経験し、同時にバレーボールの楽しさを経験したからであると考えられ、特に、後者の影響が大きいと考えられる。

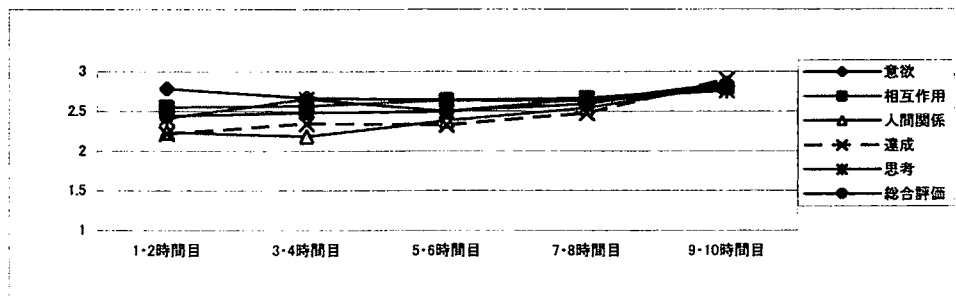


図 単元を通したクラス平均得点の推移 (形成的授業評価)

### 4. アンケート結果

アンケートの結果から、バレーボールを楽しむためには仲間同士の関わり合いを深めることが大切だと理解し、「今まで仲良くなかった人と仲良くなれた」と回答していた生徒がいたことから、仲間と関わり合いをもつことが、新たな人間関係を築ききっかけになったといえる。また、87.5パーセントの生徒が、授業前よりもバレーボールを好きになったと回答していることから、この授業が生徒のバレーボールに対する愛好的態度の育成にもつながったと考えることができる。

しかし、今後の授業で練習したい内容では、20パーセントの生徒が技術の向上を望んでいたことから、生徒同士の関わり合いを重視するとともに、技術の向上

にも重点をおき、生徒自身に技術の向上を感じさせることも大切であるといえる。そして、常に生徒が意欲的に学習に取り組むことのできる学習内容を設定することが大切である。

#### IV. 結論

##### (1) スキルテスト

「直上アンダーハンドパス」は単元前後で減少が見られたものの、「直上オーバーハンドパス」、2人組の「アンダーハンドパス」「オーバーハンドパス」については、単元前後でスキルの上昇傾向が見られた。授業では、ゲームの楽しさを深める展開にしたため、スキルの目立った向上は見られなかった。そのため、生徒自身に自分たちの成長を感じ取らせることができなかった。

##### (2) ゲーム分析

ルールを正式なルールから、生徒たちの力に応じたルールに変更したことによって、サーブ成功率、ラリー数、総触球数のすべてにおいて、値が増加した。

##### (3) 形成的授業評価

どの項目も、授業開始時は低い値だったが、授業を展開し、生徒たちがバレーボールの楽しさを感じるようになり、それぞれの項目で増加がみられた。

##### (4) アンケート

アンケートから、生徒たちがバレーボールの楽しさを感じていたこと、仲間同士で協力することの大切さを感じていたことがわかった。しかし、同時に、技術の向上も望んでいることもわかり、仲間との交流だけでなく、技術の向上も視野に入れ、時には競争意識を持たせて授業を展開するほうが、生徒は意欲を持って授業に取り組むことができると感じた。

##### (5) まとめ

今回は授業において、生徒同士の関わり合いを意識したことから、特に技術練習の時間は設けなかった。しかし、それでは、生徒自身に自分たちの技術の上達を感じさせることができなかったため、意欲の面で生徒の意識向上がみられなかった。ひとつの授業という限られた時間の中で、目に見える変化を出すことは、とても困難なことであるが、その変化を生徒自身に感じさせることが、生徒の意欲を出すために必要なことである。今後、授業を行ううえで、生徒に自分の変化を感じさせることのできる課題設定を工夫することが大切である。

##### (6) 今後の課題

今後の課題としては、生徒がバレーボールの楽しさを体験しながら、自分の変化を感じとらせることのできるルール設定（例えば、「誰もがボールに触れることができる、少人数ワンバウンドOKゲーム」から「チームで競い合うワンバウンドOKゲーム」）および、課題設定を工夫することが大切である。

#### 参考文献

- 1) 高橋 建夫、広瀬 裕司、米田 博行、増田 辰夫、上野 佳男：バレーボール教材の初心者指導の方法に関する比較研究—中学1年男子生徒を対象にして— 奈良教育大学紀要 第30巻 第1号
- 2) 小松崎 敏、米村 耕平、三宅 健司、長谷川 悦司、高橋 健夫：体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価表の作成 スポーツ学研究 第21巻 第2号 (2001)